会派会長　柴田　泉　㊞　　平成24年7月10日（火）提出

平成24年度　政務調査研究視察報告書

【視察日】 平成24年5月15日（火）～16日（水）

【視察先と内容】

第1日目「富山城址公園の石垣整備」

第2日目「南砺市の町並み保存と景観行政について」

【視察者】 柴田泉、山崎泰信、安形光征、梅村順一　計4名

政務調査研究視察　報告書　その１

平成24年5月15日（火）　富山城址公園の石垣整備について　報告者：梅村順一

富山県富山市

1　富山市の概要

＜人口は　42 万人　世帯数は、約 16 万世帯　面積 1241k㎡。議員 42 名。＞

＜北陸最大の工業都市＞富山湾から3000m級の立山連峰まで、多様な顔を持つ都市。古くは富山藩の城下町で、富山売薬等の独自の産業や北前船による物流交流で栄えた。現在は北陸最大の工業都市。2005年4月に周辺4町2村が合併して、「新富山市」となり、現在中核市である。

＜活力都市へ＞北陸新幹線や富山高山連絡道路、富山外港の整備、富山空港の国際化を進めるとともに、日常生活に密着した道路網の整備を進め、機能的な都市基盤整備を推進している。富山駅周辺整備や、中心市街地の活性化。地域密着型の新公共交通である「富山ライトレール」が開業し、路線周辺に活況をもたらしている。09年には、駅南部の市内電車環状線化が始まり、中心市街地の回遊性が向上した。

2　富山城址公園の概要

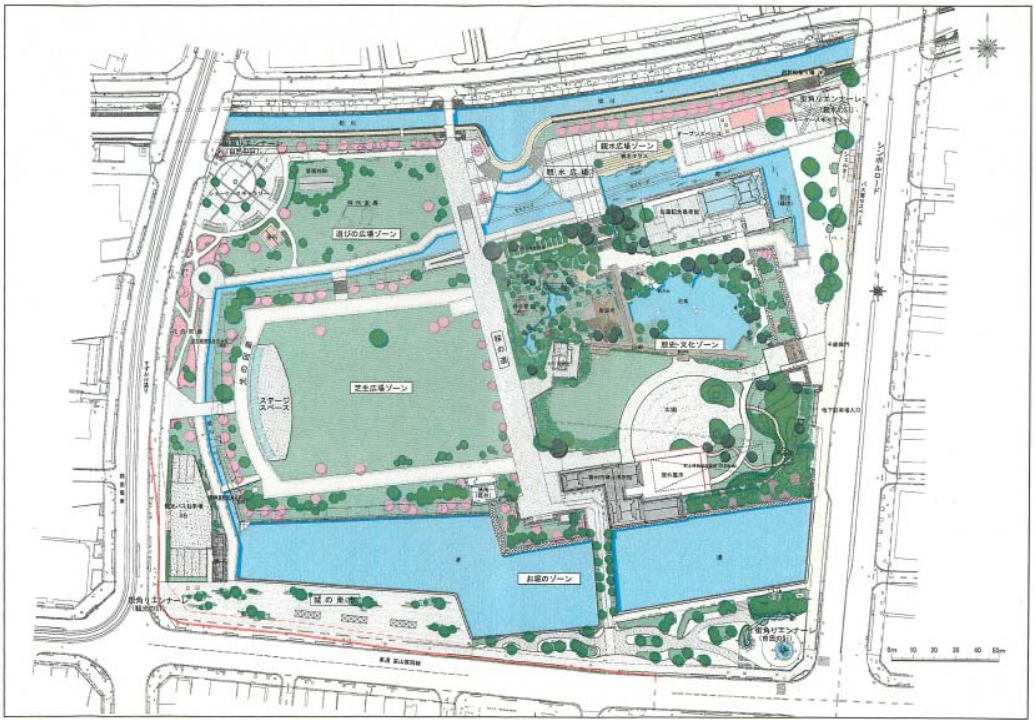
富山城は、名将佐々成政から富山前田家230年間の居城。戦国時代には佐々成政の居城であり、江戸時代には富山前田家の居城として、富山藩政の中心であった富山城。この城跡が「富山城址公園」として整備され、市民の憩いの場となっている。公園内に残る石垣や堀からは、当時の威容を見ることができる。また、戦後に建設された天守閣内の「富山市郷土博物館」では、400年以上にわたる富山城の歴史を紹介。また、平成18年からの富山城石垣改修工事に合わせて石垣の調査が行われ、石垣の築造技術のすばらしさや、歴史的価値の高さが解明されている。

〇城址公園整備計画面積　7．4ha

〇総事業費　約62億円

〇県有地

〇計画平面図



3 富山城址公園整備の経過

城址公園の整備については、「歴史がかおる都心のオアシス空間」をコンセプトとして、平成 10 年度に「城址公園整備基本計画」を策定し、公園南西部の民有地の用地取得や公園南側の整備を順次進めてきた。また、平成 16 年度には富山市の重要施策である中心市街地活性化の観点から、観光拠点としての機能や、まちづくり機能の強化を図るため、基本計画の見直しを行い、「お濠のゾーン」「歴史・文化ゾーン」「芝生広場ゾーン」「親水広場ゾーン」「遊びの広場ゾーン」の 5 つに分けて整備を進めてきた。平成20年度には「歴史・文化ゾーン」を、富山郷土博物館、佐藤記念美術館とともに歴史と文化を象徴するゾーンとして、現代和風庭園として再度計画を見直し、現在に至っている。

4 富山城石垣の歴史

戦国時代の富山城には、石垣は存在せず、土塁という築山が巡っていた。成政が秀吉に降伏した後、富山城は取り壊された。新しい富山城を前田利家の子利長が築城。利長は、慶長 10 年城と城下町の整備に着手。城の縄張を決め、石の見積もりを出させ、必要な木材を県境の飛騨横山に手配。そして若狭・越前の大工を呼び寄せ、不足する木材は能登羽咋市周辺から補充したことが記録に残っている。加賀前田家の総力を挙げての城づくりがここに始まる。

石垣の中には 2mを超える巨石が 6 個も配置されている。この巨石は「鏡石」といい、城主の武力・財力を誇示するために用いられた。富山城の初期石垣の築造は、加賀前田家の財力を背景とした前田利長によって成し遂げられた。しかし 2 年後城は大火で焼け落ち、利長は高岡城を築城して移り、城は荒廃した。その後、富山藩分藩にあたり、加賀藩主前田利長の子利次が初代藩主となる。利次は、加賀藩配下にあった荒廃した旧富山城を借城し、改修して富山藩の城とした。しかし万治 2 年の地震で石垣は崩壊し、翌年から改修整備が始まる。これ以後、富山城はたびたび地震・大火・洪水などの天災に見舞われ、財政の逼迫とともに十分な石垣改修ができないままとなった。安政 5 年の飛越地震での災害はひどく、石垣はところどころ崩壊し、大手土橋は崩れてしまったことが『地水見聞録』に描かれている。その後は、明治以降のハバキ石（玉石積）の設置、昭和 29 年の富山産業大博覧会の際の工事での積直しなどにより、石垣は大きく姿を変えてきた。

5 富山場の割石技術

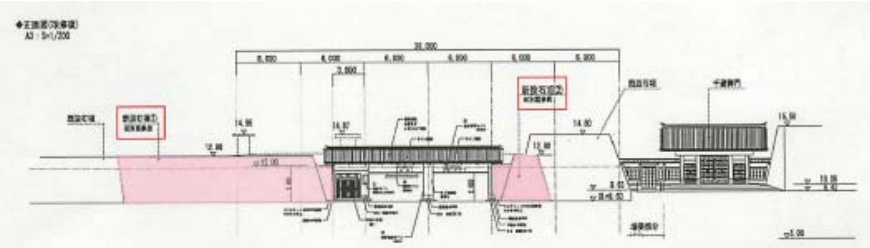
石垣の石材は、富山県東部の河川から調達された川石（川原石）である。この石は川の水の中を転がって運ばれてきた石で、丸いものが多く、表面はすべすべしている。これを石垣石材として利用するため、丸い石を割って平面を多くし、石と石が接する（アタリという）面積を増やし、石垣の安定度を高める工夫がなされている。また石を割ることにより、一つの石から複数の石材が調達されるという効率性もある。石割は河川敷内かその周辺において行われたと推定される。

川原石は一定の順序によって石割が行われた。城に運ばれてからの加工は、表面の整形あるいは石積の際の合場の調整加工程度であった。石割のための矢穴加工も、丁寧に角を作ることはせず、省略して機能性・迅速性を重視した加工方法となっている。

石材が富山城に運ばれた経路や方法は不明だが、金沢城では石引道と呼ばれた陸路を使って県境の戸室山から多数の石材が運び出された。その距離は約 10km で、山あり谷あり川ありの難業であったといわれている。富山では河川ということで筏や船を利用したと考えることは容易だが、金沢穴生は陸路の運搬の経験を十分積んでいたことからみて、陸路が主体であったとみられる。

6 石垣整備の経緯

石垣整備については、平成 10 年度の基本計画において、「石垣・土塁は防災上の安全性及び歴史等を調査し保存する」とし、平成 16 年度の基本計画において「歴史的遺構を活用した都市景観の形成」と位置づけ、“保全”と“景観形成”の観点から平成 17 年 度より整備を開始した。



図：整備後立面

7 今後の展開（整備予定）

「芝生広場ゾーン」は、平成 23 年度に全面供用開始。「歴史・文化ゾーン」については、平成 24 年度に地下駐車場上部及び中央園路の整備、それ以降に残りの日本庭園の整備を行い、城址公園内部の全面供用開始を目指している。「親水広場ゾーン」「遊びの広場ゾーン」については、時代のニーズの変化により生まれた他事業との調整を図るため、近々に計画を見直し、整備に入る予定。

富山市

〔感想・岡崎市への反映〕

富山城址の視察ができた。特に石垣整備に関しては本格的な整備工事が進められた。ホームページからもわかるように、石垣の歴史を確認したうえで、原材料の調達から富山城の景観にも即した石積み工事が実施されたことは、驚きに堪えない。富山城址公園は、天守閣を主体とするものでなく、市民の憩いの場所として再生されている。以前は多くの大木が城址を埋め尽くしていたそうだが、ほとんどの木が伐採され広々とした公園だ。また石垣整備事業の着手前と後を比較すると、驚くほどの変化である。総面積7．4haの中に総事業費62億円を投資できる富山市は、歴史と文化を守る高い意識の表れだと感じた。

岡崎市においては、徳川葵武将隊の第2ステージが始まった。岡崎城址公園の整備事業が、将来の観光や本市のPRとなるような、本格的な事業となることを期待したい。

政務調査研究視察　報告書　その２

平成24年5月16日（水）　南砺市の町並み保存と景観行政について　報告者：梅村順一

富山県南砺市

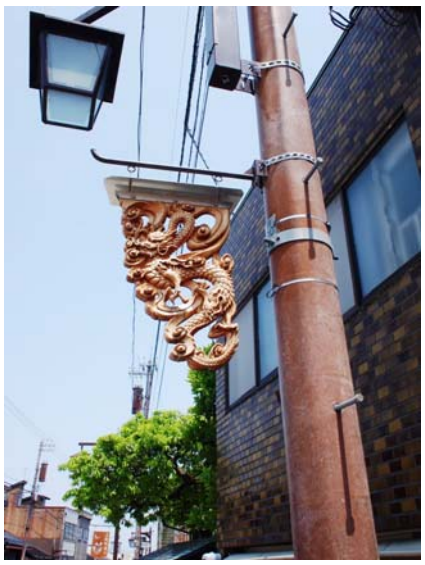
1　南砺市の概要

人口5万4736人　面積668k㎡、世帯17399戸、議員30 名。砺波地方の南に位置する地域の呼称を新市誕生に際に公募して決定した。緑豊かな自然環境と多彩な伝統文化を共有する四町四村が、2004年11月に合併して誕生。県の南西端に位置し面積の8割が白山国立公園などを含む森林。アルミニウムや建材、工業機械などの工業、良質米を生産する農業、観光業が基幹産業。「五箇山の合掌造り」はユネスコの世界遺産。【特産品】干し柿、五箇山豆腐、和紙、そば、里芋 【主要プロジェクト】南砺げんきなまちづくり事業（11年～）

2　井波地区の概要と特徴

井波は、本願寺五代門主が京都から下向し、この地に寺を建てたことにより始まる。地下からこんこんと湧きです霊泉を発見し、これが「瑞泉寺」という名と同時に、「井波」の町名の起源となる。そして稲見は、門前町として発展。推薦時は、幾度か焼失し、その都度再建された。特に江戸時代中期の再建のおり、京都本願寺御用彫刻師、前川三四郎が下向、地元大工が参加し彫刻の技法を習い広めたのが、井波彫刻の始まりである。

3　町並み保存の取り組み



八日町入口より北側の市街地は、大正14年の火災で焼失したが、八日町通りは焼失を免れ、古い町並みを残し、瑞泉寺の門前町としての雰囲気を残して多くの観光客を迎えている。

○町並み景観づくりの始まり

ア）門前町の雰囲気を残す古い町並み

イ）木彫りの街らしい木製彫刻の看板を設置

ウ）独特の雰囲気を持つ、信仰と木彫りで象徴される町の形成

○具体的な活動例

イ）八日町通りの「木製看板設置」

ロ）上新町通りの「大のれんと看板アート」

ハ）井波三日町の「こみち散策と灯りアート」

行 燈　　灯りアート 風景
道の中央、軒先に行燈を配する

○南砺市景観づくり事業

南砺市では、商店街や住宅団地、町内会、農村集落等の地域において、地域の歴史、風土、特区性を活かした住民主体の景観づくり活動に対して、推進と支援を図るために、助成制度を設けている。

※補助金（補助率 1/2、ソフト事業20万円、ハード事業200万円）

4 町並み保存の課題

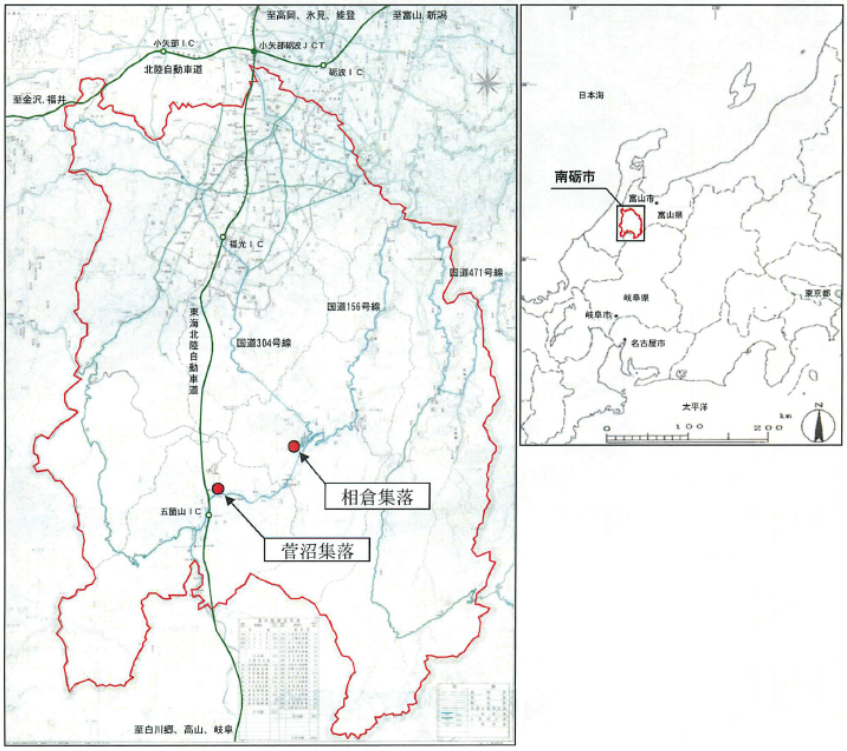
住まいづくりの提言＞

建物や看板は皆の目に触れるものです。見て心地よいものや不快なもの、ときには視覚だけでなく収穫や音に関しても様々な影響が生まれてくる。そこで、「外はみんなのもの」という思いやりが大切。

5 五箇山合掌作り集落の保存

［地理］ 南砺市相倉、菅沼集落は、富山県の南西部、岐阜県との県境近くに位置する農村集落。日本海へ注ぐ庄川が霊峰白山を中心とする深い山岳地を縫うようにして流れるこの地域は、「合掌造り家屋」を中心とした伝統的な集落景観と周辺の自然環境がよく残っている地域である。またこの地帯は日本有数の豪雪地帯でもあり、1950 年代まではこの地域と地域外との交渉は極めて限られ、「日本に残された最後の秘境」と呼ばれたこともあるが、現在では太平洋と日本海を結ぶ東海北陸自動車道が通り、物流の要所として、また富山県の産業、観光の南玄関として注目されている。

［歴史］ この地方は通称「五箇山」と呼ばれ、8 世紀頃より白山を信仰対･象とする修験の行場として開かれ、13 世紀中頃になると浄土真宗が地域一帯に浸透した。浄土真宗の布教の歴史上においても由緒深い地域であり、現在でも人々は信仰に篤く、浄土真宗は人々の精神的な結びつきの拠り所となっている。また、奥深い山間の地であることから、源平の争いによって敗れた平家の落人伝説が今でも語り継がれている。 藩政時代の五箇山は加賀藩に属しており、明治時代になり町村制が始まると、相倉、菅沼集落はそれぞれ富山県平村、上平村に所属し近代的な行政組織に組み込まれていき、平成 16 年には平村と上平村は近隣の 6 町村と合併し、南砺市となり現在に至っている。



［保存と活用の基本的理念］

五箇山の合掌造り集落の特徴は、次のようにまとめることが出来ます。

① 住民が住まいする史跡であること

② 合掌造り建物という建造物を主体とした史跡であること

③ 豪雪地帯の山村集落であること

④ 指定地の全ての構成物が地上に現れていること

以上より、史跡の管理団体である南砺市は、この合掌造り集落を保存しまた活用していくために、次の諸項目を基本的な考え方としています。

(1) 集落は、土蔵や板倉などの付属工作物、耕作地や水路などの環境物件から成る農村集落としての歴史的景観が良好に保存されており、農村集落総体としての保存に努める。

(2) 集落は、周辺の自然環境と一体化した景観が良好に保存されており、自然物の一帯的な保存に努める。

(3) 建物は、遺産を象徴する文化財であり、国内においても希有な存在であることから、建物の歴史性、意匠、技術工法等の保全と後世への継承を図る。

(4) 建物は、その構造上の特徴から特に火災に留意する必要があり、防災施設の充実を優先する。

(5) 集落成立の背景には、五箇山独特の伝統文化が深く関与しており、地方文化の象徴として総体的な保存を考慮する。

(6) 集落は、住民が生活の場としている「生きた史跡」であることから、住民の日常生活への配慮を尊重する。

	(7) 普及啓発のために、便益施設の設置や史跡の本質を尊重した修景整備に努め、先人の英知をしのび、五箇山文化の理解と学習を助成する。 防火訓練－放水銃の一斉放水－（菅沼集落）
南砺市	**〔感想・岡崎市への反映〕** 井波地区の景観まちづくりの視察で、ひとつの地域をモデル地区にして個性ある展開を進めることで追随する地域ができることが確認できた。町並み保存の方針を策定し、理解と意欲のある地域を積極的に支援していくことが必要であろう。市が積極的な支援態勢をとることには好感が持てる。今後の展開の上で、合併編入した市町村における同様な施策となるように配慮すべきではないか。そのためには、優良な景観に対に対する表彰制度は、ひとつの成果があると考える。 五箇山の合掌集落は、世界遺産に登録されたことで入り込み客の増加を促進できた。しかし、登録された昭和45年当時より時間が経過し、集落の維持管理に対するモチベーションは高いとはいいがたい。五箇山 ICの開通や新幹線の開通によりで飛躍的に入り込み客が増えることで、観光地としてのあり方や、集落保存の新たな方針を打ち出すときがきているように感じた。 市民の反応は良好である。景観町づくりを達成することが目的でなく、その過程で住民が話し合い仲良くなりながら地域の絆を形成していくことが大切なことであろう。結いの仕組みが薄れる中で、行政や公共団体が支援していく仕組みづくりが求められている。岡崎市においても、行政と住民が一体となった町づくりが進むことを期待したい。